

## 組織的な大学院教育改革推進プログラム 平成19年度採択プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称	: 専門看護師育成・強化プログラム（専門看護師リーダーの養成）
機関名	: 千葉大学
主たる研究科・専攻等	: 看護学研究科看護学専攻
取組代表者名	: 中村 伸枝
キーワード	: 専門看護師強化コース、専門看護師リーダーの養成、高度実践看護、博士後期課程に連動したコースワーク、看護管理者との連携

### I. 研究科・専攻の概要・目的

#### 1. 概要

千葉大学看護学部は、国立教育研究機関のなかで唯一の独立した学部として昭和50年4月に設置され、30年以上の看護学教育の歴史をもつ。看護学部の完成年度の翌年度（昭和54年4月）には、大学院看護学研究科修士課程が設置された。平成5年4月には看護学研究科の改組により博士課程（博士前期課程・博士後期課程）が設置され、研究能力と高度実践能力の双方に対応したカリキュラムを導入した。また、平成6年には修士課程（看護システム管理学専攻）が設置、平成21年4月には大学院看護学研究科が部局化され、現在に至っている。現在、看護学部の学生定員は340名、看護学研究科博士課程の学生定員は80名（前期2年50名、後期3年30名）、看護学研究科修士課程は21名であり、これまでの看護学部卒業生はおよそ2,500名、研究科修了生は700名を数える。本看護学研究科の修了生は、医療機関等、実践領域で重要な役割を果たすとともに、多くの新設看護系大学や大学院に就職し、専門看護師や認定看護師等看護実践者、看護研究者、教員の養成に従事している。

本看護学研究科の教員数は、平成21年5月1日現在、教授15名、准教授10名、講師6名、助教23名に加え、特任准教授1名、特任講師2名、特任助教1名、特任教員2名、技術専門職員2名から成り、日本の看護系大学のなかで最大規模の教員を有している。本看護学研究科は豊富な人材を生かし、その教育や研究の成果を社会に発信することで、看護及び保健医療福祉の質向上に資する役割を担ってきた。これらの積み重ねが、平成15年度21世紀COEプログラム「日本文化型看護学の創出・国際発信拠点（実践知に基づく看護学の確立と展開）」の採択につながり、その後も平成20年度には看護学研究科・看護学部において4つのGP（大学院GP、学び直しGP、現代GP、特色GP）が同時進行するまでに至っている。

#### 2. 人材養成目的

看護学研究科看護学専攻では、看護師の行う実践の諸活動に科学的根拠を与える基礎的理論とその応用を体系的に教授研究し、国民の健康生活を守ることのできる看護支援方法の研究・開発が自立して推進できるナース・サイエンティストを育て、我が国の精神文化にふさわしいヒューマンケアの基盤を確立させることを目的としている。博士前期課程では研究者としての基礎的能力を育て、博士後期課程では看護学分野の調査研究が独立して実施でき、かつ知識の蓄積・拡大・精選・伝達等に貢献できる能力を養う。看護学研究発展の長期的展望に立ち、看護学固有の課題、すなわち、看護専門職の行う援助技術の発展に直結した研究課題を重視し、かつ看護学の学術的基盤を確実に発展させるために、医学や保健学等健康科学の広範な領域の研究手法、さらには人文・社会科学系、自然科学系の研究手法の応用にも重点をおいており、複数の教育研究分野の指導教官から研究指導が行われている。

#### 3. 教育研究活動の状況と課題

医療の高度化や専門分化を背景に平成6年に専門看護師制度が発足し、平成10年に日本看護系大

学協会による専門看護師教育課程の認定が開始されてから 10 年以上が経過し、平成 22 年 3 月現在、専門看護師養成の課程認定を受けている大学院は 60 校である。本看護学研究科では、平成 12 年度に 2 分野の専門看護師教育課程が認定され、現在では 4 分野（がん看護、老人看護、小児看護、母性看護）が認定、平成 22 年には精神看護の分野も認定を受けた。平成 22 年 3 月現在、専門看護師教育課程の修了者 59 名、専門看護師 19 名を輩出している。

専門看護師教育課程の多くは専門的な看護実践能力の習得に主眼を置く教育を展開している。これに対し、本看護学研究科博士前期課程は、研究能力と高度看護実践能力を併せもつ専門看護師の養成を本教育課程開設当初から目指してきた。専門看護師を目指す学生にも修士論文研究を課し、看護学分野の研究能力を育成すると共に、高度な看護実践能力を養うことを目的とする科目を開講している。このうち、「看護実践方法論Ⅰ」、「看護実践方法論Ⅱ」は、夏期集中開講を実現しており、将来、専門看護師としての活動を希求する看護職者にも科目履修を可能としてきた。しかし、本プログラム採択前には、専門看護師の実習は単位化されておらず、科目履修も不可であった。また、専門看護師を目指し博士前期課程を修了した者は、専門看護師の認定を受けることや認定後の活動等において様々な困難を抱えていたが、修了生への継続教育は一部の教員による試みが行われているのみであり、系統的な教育は実施していなかった。

以上の課題を解決するためには、博士前期課程において専門看護師教育を行うだけではなく、専門看護師教育課程修了者および専門看護師として活動している者を対象としたプログラム、ひいては大学院における体系的な教育改革が必要と考えたことが、本プログラムを申請する動機となった。

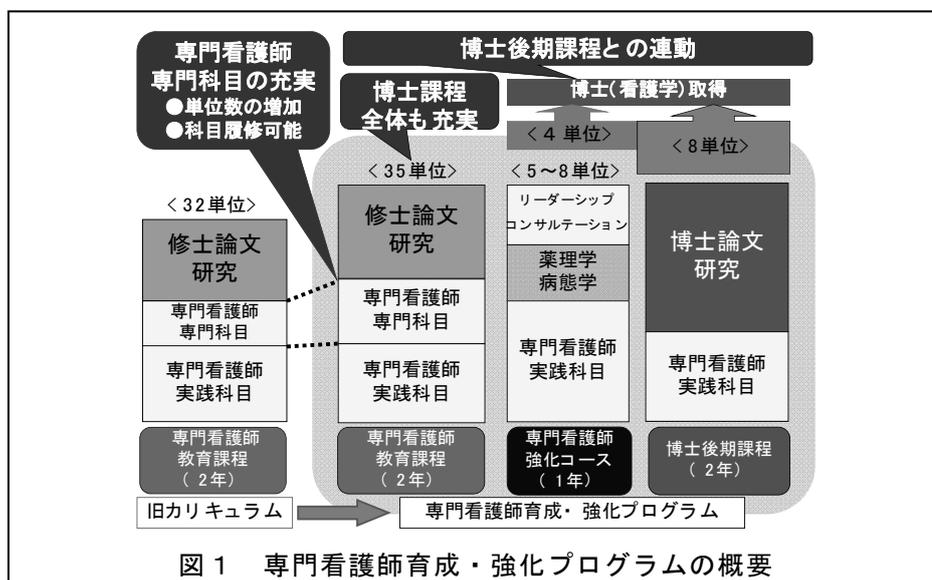
## II. 教育プログラムの概要と特色

### 1. 専門看護師育成・強化プログラムの概要

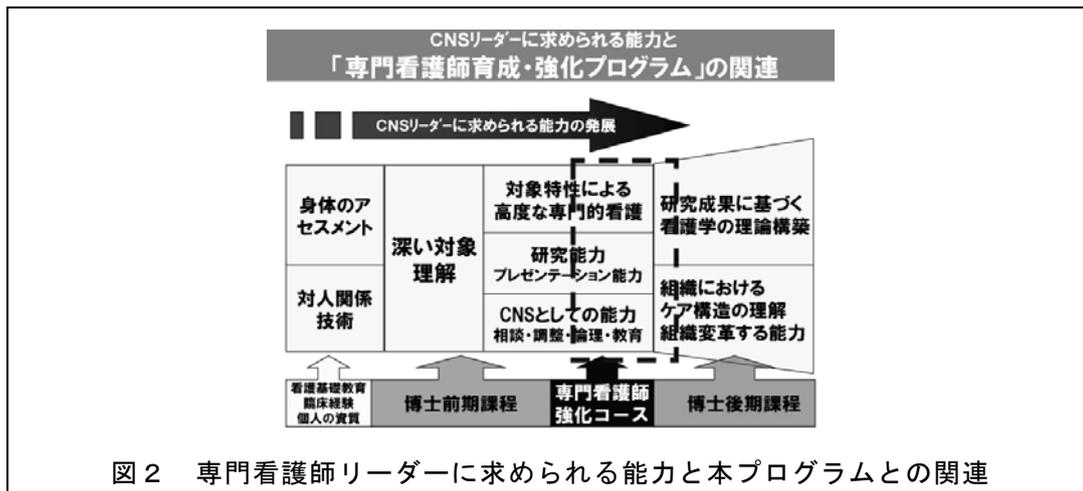
本プログラムは、博士前期課程修了後に「専門看護師強化コース」を新設し博士後期課程の充実を図ること、および、博士前期課程での専門看護師教育のさらなる充実を図ること、さらには研究能力と高度看護実践能力、看護ケアの質向上のための組織変革力を育成することにより、専門看護師リーダーとなる人材を養成することを目的とした。

「専門看護師強化コース」は、博士前期課程と博士後期課程の中間に位置づけ、博士後期課程の 1 年次に相当する独創的なコースワークを計画した。「専門看護師強化コース」で修得する 6 単位のうち、4 単位を博士後期課程の履修単位として読み替え、コース修了生が博士後期課程に進学した場合には、千葉大学大学院学則の第 33 条 2 項を適用し、2 年間での修了を可能とした。

さらに博士前期課程においても、専門看護師の実習の単位化等単位の実質化や、高度実践看護にかかわる科目の新設等専門看護師教育の充実を図ることで、博士課程全体を再編・充実させることとした。



専門看護師リーダーに求められる能力は、身体アセスメントや対人関係技術を基盤に、深い対象理解や対象特性による高度な専門看護を行う能力、研究を遂行する能力、プレゼンテーション能力、相談・調整等の専門看護師としての専門能力を積み上げ、さらに、研究成果に基づく看護学の理論構築や組織におけるケア構造を理解し、組織を変革する能力へと発展していくと考えた。これらの能力のうち基盤となる能力は、看護基礎教育や、臨床経験、個人の資質等により担保されていくが、より高度な能力は博士前期課程、博士後期課程を通して習得されていく。従って、博士前期課程修了後に「専門看護師強化コース」を新設することをはじめとした本プログラムの推進により、看護系大学院の教育改革の推進に資することはもとより、専門看護師リーダーに求められる能力が強化されることを支援期間終了後の成果として期待した。



本プログラムでは、専門看護師の活動や継続学習のために看護管理者との連携が重要であると考え、専門看護師導入モデル施設を拠点とした看護管理者との協働により、専門看護師の教育や活動の環境を整備していった。また、専門看護師養成の先進国である海外との連携を図り、「専門看護師強化コース」の科目に海外施設におけるCNS研修を取り入れると共に、海外から専門看護師や施設管理者、教育者等を招聘した国際講演会・シンポジウムを開催し、最新の情報を発信した。さらに、専門看護師の組織作りとして、講演会やシンポジウムの活用や研究の推進を行った。

### Ⅲ. 教育プログラムの実施結果

#### 1. 教育プログラムの実施による大学院教育の改善・充実について

##### (1) 専門看護師強化コースの開講

本学大学院看護学研究科に、1年コースの「専門看護師強化コース」（以下、本コースという）を新設し、金曜日と土曜日を中心に開講した。本コースに入学した学生は、5～8単位を取得し、修了する。本コースの特徴は、以下の4点である。

- 専門看護師教育課程修了者と専門看護師を1年間在職のまま受け入れること
- 本コース修了後に本学博士後期課程に進学すると、本コースで取得した単位のうち4単位が博士後期課程の単位として認定され、最短2年間で博士（看護学）を取得することが可能であること
- 専門看護師強化コースを、本学の教員に加え、現場の看護管理者を始めとして、著名な非常勤講師陣を迎えて運営すること
- 充実した海外でのCNS研修を実施すること

本コースは、表1で示した6つの授業科目により構成されている。この構成にあたっては、本プログラムの目的に沿って、専門看護師に必要な最新かつより深い内容の病態学と薬理学を据えた。さらに、コンサルテーション能力・リーダーシップ能力・組織の課題を解決する能力の向上に資す

る講義・演習が必要と考え、構成に加えた。担当教員は、本学教員の他、専門看護師リーダーの育成にふさわしい非常勤講師を迎えることとした。自施設の課題を解決する演習等は科目を履修する学生のみで行ったが、講義についてはホームページやポスターで広報を行い、大学院生や関心をもつ看護師、教育者に公開した。「CNS 研修」は、専門看護師教育が行われ、かつ、専門看護師が役割を發揮している医療施設での研修が可能であることを前提に、本学の小児看護学教育研究分野を中心とした Exchange Program において 70 名以上の大学院生が研修を行ってきた実績のある UCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）看護学部と UCLA Health System、および、看護学部と部局間交流のあるミシガン大学看護学部と University of Michigan Health System を候補として調整を行った。ミシガン大学看護学部とは学部間協定の再締結を行った。最終的に、がん看護、小児看護、母性看護の CNS 研修は UCLA で、老人看護の CNS 研修はミシガン大学で実施することとなった。

研修では、臨床の場で行われている高度な看護実践を理解する必要があることに加え、受講生が専門性に合わせて研修の場を選択したり、勤務の都合等を考慮した個別のスケジュールで活動したりするため、英語によるコミュニケーション能力を高める必要がある。平成 20 年度は、受講生と他の大学院生や教員からも希望を募り、1 年間に渡り Native 講師による English Class を開講した。加えて、千葉大学客員教授の Dr. Perri J. Bomar による 10 回に渡る「Advanced Clinical Nurse Specialist」の講義を開講した。平成 21 年度は、受講生と引率教員に対し研修前の 5 月から 7 月に 20 回の Native 講師による English Class を開講すると共に、Web 上での自己学習を可能にした。

表 1 専門看護師強化コースの科目概要

授業科目名(単位数)	学習目的
専門看護師のための最新病態学 (1 単位)	看護の対象者の病態を細胞、組織、さらには遺伝子 レベルで生じている現象と結びつけることによって、より深く理解する
専門看護師のための最新薬理学 (1 単位)	薬理学の基本的事項について、「何故そうなるのか」、「何故そうするのか」と問い直し、その答えを生理学、生化学、分子生物学、病態学、人体構造学等の諸知識を統合することで導き出す。この統合作業を基に薬物と生体との相互作用や薬物の作用機序に関する最新知識を習得する。さらに、薬物の臨床応用の実際と問題点を学習する
リーダーシップ実践強化演習 (1 単位)	高度実践看護師が活躍する組織や集団が、より質の高いケアを提供し組織のケアの質を向上させるために必要なリーダーシップ活動に関する知識、役割について学ぶ
組織における高度実践看護論 (2 単位)	組織における専門看護師の高度看護実践、経営や管理への 役割について学ぶと共に、自らがもつ組織の課題を解決する ための研究手法を学ぶ
コンサルテーション実践強化演習 (1 単位)	実践の場において、質の高いケアを提供し組織のケアの質を向上させるために必要な、対象、看護師、多職種に対するコンサルテーションの方法について学ぶ
CNS 研修 (2 単位)	専門看護師養成の先進国である米国の最先端の医療施設において、専門看護師が行う活動の実際を学び、専門看護師の役割・機能、および必要とされる能力について学ぶ

専門看護師強化コースの開講に伴い、募集要項の作成や学生証の発行等の事務手続きや、科目の責任教員の意見交換等が必要となり、大学院教務委員会の下部組織として「専門看護師強化コース・ワーキンググループ」を組織し 2 カ月に 1 回程度の会議を開催した。履修審査や単位認定は、看護学研究科の科目履修に準じて実施することとした。

## (2) 専門看護師強化コースの開講による大学院教育の改善・充実

平成 20 年度より本コースを開講し、平成 20 年度は 2 名（がん看護、小児看護）のコース生と 3 名の科目等履修生を受け入れ、平成 21 年度は、4 名（がん看護）のコース生と 1 名の科目等履修生を受け入れた。

全ての科目は修了後に授業評価用紙を配布し、授業評価の結果を教員に伝え次年度に改善した。授業評価結果等から、以下の点について大学院教育が改善・充実したことが明らかとなった。

### ① 高度実践看護の根拠となる薬理学や病態学に関する学習の強化

専門看護師強化コースのなかで、受講生全員が薬理学や病態学に関する知識の重要性を述べて

いた。近年、論議されている看護師の裁量権やより高度な看護実践を担う看護師の育成のなかでも薬理学や病態学の強化が示されており、本コースでの取り組みはその試行としての意義も大きい。より高度な看護を実践するために必要な学習として薬理学・病態学を位置づけ強化したことにより、高度実践看護に関する大学院教育が改善・充実した。

#### ② 専門看護師・修了者との討議や所属する組織の分析・事例分析を通じた学習の強化

専門看護師が複数在職する施設は増加してきているもののまだ少数であることや、施設により専門看護師の役割は異なるため、専門看護師や修了者が自身の活動に関する具体的な示唆は得られにくい状況にある。2年間の公開講義の参加者数は「コンサルテーション実践強化演習」58名、「リーダーシップ実践強化演習」19名、「組織における高度実践看護論」117名にのぼり、95%以上が「とても満足」「まあまあ満足」と回答しており、社会的ニーズの高さを反映していた。

コースの科目では、始めに基本的な理論を学び、次に、それぞれの役割を發揮している専門看護師等から具体的な活動を学び、その後、自身が抱える課題について分析し解決に向けた方策を考え討論するという系統的な構成とした。このような系統的な学習により受講生は学びを深め問題解決能力が高まった。専門領域が異なる専門看護師・修了者と、自身の在職している施設で現在進行している課題に対して分析や討議を行うこと、他の専門看護師の事例を含めた具体的な活動内容を聴き討議することは、講義を聴く学習では得られない学びを得る機会となっていた。また、自らの課題や活動をプレゼンテーションすることは、課題や活動の本質や関連する事柄を整理し他者に伝える能力を高めていた。以上より、専門看護師・修了者との討議や所属する組織の分析・事例分析を通じた学習により、高度実践看護に関する大学院教育が改善・充実した。

#### ③ 専門看護師が多様な活動を担う海外研修を通じた学習の充実

CNS研修には、2年間で6名のコース生全員が参加した。海外等専門看護師が機能している場における研修では、制度や役割が異なっても、専門看護師の活動への展望や可能性を見出す意義が大きかった。また、専門看護師が機能するに至った経緯を学ぶことで、自らが所属する組織のなかで改革の道筋を立てていくヒントが得られた場面もあった。さらに、受講生は、看護の質向上という同じ目的に向かう仲間の信念に共感したり、励ましの一言から大きな支えを得る体験もしていた。以上より、海外研修を通して、高度実践看護に関する大学院教育が充実した。

### (3) 博士前期課程の大学院教育の改善・充実

#### ① 専門看護師の実習の単位化による大学院教育の改善

博士前期課程の改善として、従来、科目として単位化されていなかった専門看護師実習を「看護学実習（6単位）」として認め科目履修を可能とした。これにより、平成20年度に1名が科目履修で看護学実習の単位を修得し、平成21年度に専門看護師の認定を受けることができた。

#### ② 「ナーシング・フィジカル・アセスメント」の新規開講による大学院教育の充実

シミュレーション機器を取り揃えたシミュレーション・ラボラトリーの開設とともに、博士前期課程における授業科目「ナーシング・フィジカル・アセスメント」を新規開講した。「ナーシング・フィジカル・アセスメント」は、高度な看護実践に求められる包括的なフィジカル・アセスメント能力の修得を目指し、シミュレーション機器を活用しながら展開した。内容は、米国で高度実践看護師として活動を行う講師から生活機能や身体機能のアセスメントを学ぶ、医学研究の協力を得て医師から診療技術を学ぶ、救急看護認定看護師からトリアージと救急蘇生を学ぶことに加え、小グループによる事例分析とシミュレーション機器を用いたフィジカル・アセスメントの実際を発表し討議することで学びを統合するものとした。受講生は、平成20年度は10名、平成21年度は8名であった。この他に聴講生が5名程度出席していた。授業評価の結果は概ね肯定的な評価が多かったが演習を含む時間数の不足も指摘されていた。平成21年度からは、シミュレーション・ラボラトリーを活用した自主学習が可能となるよう体制を整えた。

#### ③ シミュレーション・ラボラトリーの開設による大学院教育の充実

平成20年12月、看護学研究科内の一室を学内経費を得て修繕し、シミュレーション・ラボラト

リー（以下、ラボという）を開設した。その後「ラボ利用の手引き」を作成し配布した。手引は、ラボ利用の規則、ラボ内での利用申請書、ラボ外へのシミュレーション機器の持ち出し申請書等で構成されており、シミュレーション機器の破損を防ぐために、原則としてシミュレーション機器はラボ内で使用することを定めた。平成21年からはこの申請書を活用するとともに、内容をWeb上のカレンダーに入力し、ラボの利用状況の情報共有を行なった。平成21年1月から12月までのラボの利用日数は延べ64日間であった。ラボは、本学医学部附属病院看護部の新人研修等の研修でも活用された。ラボに設置されたシミュレーション機器である「シムベビー」を用いて、教育の可能性を検討する取り組みを実施し、実践報告として千葉大学看護学部紀要第32号に発表した。以上より、ラボの開設により高度実践看護に関する大学院教育、および看護職への実務研修の充実を図ることができた。



写真 1～4 ナーシング・フィジカル・アセスメントの様子とシミュレーション・ラボラトリー

#### (4) 調査研究による大学院教育の改善・充実に向けた示唆

専門看護師教育課程のより一層の充実を図ること、及び、専門看護師教育課程修了者の認定申請や、専門看護師の活動を進めるための基礎資料を得る目的で、専門看護師および専門看護師教育課程修了者（未認定者）の教育ニーズとサポートニーズ、および看護管理者の専門看護師への役割期待とサポートの実際等を明らかにするための全国調査と、専門看護師への多職種のニーズを把握する一施設を対象とした調査を実施した。研究にあたっては、研究を通じたネットワークの構築や研究成果の早期活用を目指し、専門看護師や看護管理者を共同研究者に加えると共に、得られた知見をできるだけ早く公表するよう努めた。

##### ① 専門看護師・修了者・看護管理者に対する全国調査による大学院教育の改善・充実に向けた示唆

研究目的：専門看護師および専門看護師教育課程修了者（未認定）の教育ニーズとサポートニーズを明らかにする。専門看護師および専門看護師教育課程修了者（未認定）に対する看護管理者の役割期待とサポート、専門看護師教育課程に対するニーズを明らかにする。

調査期間：平成 20 年 9 月～12 月

研究方法：郵送による自記式質問紙調査、研究施設の看護学部倫理審査委員会の承認を得た

回収数と回収率：専門看護師 156 名 (67.2%)、専門看護師教育課程修了者(未認定)195 人 (67.5%)  
看護管理者 203 名 (43.1%)

成果報告：国際シンポジウム「専門看護師をめぐる展望」での報告に加え、3つの学術集会で6編の論文発表を行い、参加者と討議を行った。

調査結果の概要：専門看護師教育課程は、「専門看護師としての実践力を高める教育」「修了後の継続した相談」等が、どの対象者からも共通して求められており、ニーズに応じていくためには、専門看護師教育に関わる教員が専門看護師教育に対する展望や熱意をもち、教育の質向上

と臨床や専門看護師との協働による実習指導や修了後の支援を図る必要が示された。また、専門看護師、修了生、看護管理者で異なるニーズも明らかとなり、多様なニーズに対応するために、教育課程間や看護管理者との協働、専門看護師の教育への参加、修了後の教育等に取り組んでいく必要が示された。

② 高度先進医療を提供する病院（一施設）における専門看護師／認定看護師に対する医療職者のニーズ調査による大学院教育の改善・充実に向けた示唆

研究目的：高度先進医療を提供する病院における専門看護師・認定看護師に対する医療職者のニーズを把握する

研究対象：高度先進医療を提供する大学病院（一施設）に在職する医療職者

調査期間：平成20年2月～4月

研究方法：自記式質問紙調査，研究施設の看護部倫理審査委員会の承認を得た

回収数と回収率：看護師297名（54.5%），看護師以外の医療職者337名（41.2%）

成果報告：2編の論文が学会誌・紀要に掲載された。また、海外発表（5th International Council of Nurses International Nurse Practitioner / Advanced Practice Nursing Network (INP/APNN) Conference, 2008）と、国内学会で発表を行い、参加者と討議を行った。

調査結果の概要：高度先進医療を提供する病院における専門看護師／認定看護師に対する医療職者のニーズとして、相談者がアクセスしやすい体制を整えると共に、高度先進医療に必要とされる日常の看護ケアの質向上に取り組むことや、相談の依頼を待つだけでなく様々な機会を利用して現場のニーズを敏感にとらえること、多くの診療科で専門的な知識が求められる

「がん看護」「緩和ケア」「糖尿病看護」等に関する院内全体の看護師に向けた教育や、稀な疾患・専門性の高い看護技術に対するタイムリーな教育への参画、より看護の専門性が求められる場面に積極的に加わり、多職種間の連携を図りながら問題解決にあたる重要性が示された。

これら2つの研究結果により、専門看護師の活動および専門看護師教育への示唆が得られた。

(5) 看護管理者との連携による大学院教育の改善・充実

本プログラムでは、専門看護師を導入している病院の看護管理者と協働しながらプログラムを推進し、専門看護師の教育や活動環境を整備していくことをめざし、2回の専門看護師導入モデル病院調整会議を実施した。また、専門看護師、修了者、看護管理者に対する全国調査の結果を受けて、千葉県立病院看護局・部長会議と共同で専門看護師のクリニカルラダー・育成ラダーの作成に取り組んだ。県立病院には専門性の高い施設が多く専門看護師・認定看護師の雇用拡大を目指しているが、専門看護師・認定看護師の雇用状況には施設による差が大きい。専門看護師育成について意見交換を行い共通の指標を作ることは、専門看護師や修了者を育成するという上で意義が大きいと考えた。4回の会議を経てクリニカルラダー・育成ラダーが作成された。以上の活動を通し、看護管理者の専門看護師に対する期待やニーズ・課題等を知ることができ、修了後を見据えた教育に対する具体的な示唆が得られた。また、看護管理者との関係性が深まり、専門看護師を育成する環境が改善される等の効果があり、大学院教育の改善・充実が図られた。

## 2. 教育プログラムの成果について

### (1) 「専門看護師強化コース」の開講による成果

専門看護師教育課程修了後の継続した専門看護師教育として「専門看護師強化コース」が位置づいたこと

高度実践看護を行う専門看護師には、実践・相談・調整・倫理調整・教育・研究の役割を果たすための様々な学習が求められる。日本における専門看護師はまだ少数であるため、自身が専門としていない幅広い領域や看護管理にかかわる活動を求められることも多い。専門看護師強化コースでは、在職のまま1年間、6名の学生を受け入れた。受講生は、専門看護師として認定されてから年数を経ている学生と、専門看護師として認定されていない修了者が含まれており専門領

域も様々であった。同じカリキュラムであっても、専門看護師として認定されてから年数を経ている学生は、学習内容により自らの活動を客観視したり、新たな情報を得て知識のブラッシュアップをはかっていた。一方、専門看護師として認定されていない修了者は、専門看護師となるために必要な能力や動機づけ、認定に向けたより具体的なサポートを得ており、1名は本コース在籍中に認定される等それぞれに学びやサポートを得ていた。専門領域が異なる受講生が共に学習を進めることは、自らの専門領域における活動を客観視したり、特徴を再認識する上で意義があると共に、専門看護師という同じ役割を担う仲間として共有できる感情や認識があった。以上より、在職のまま専門看護師教育のコースで学ぶことは、受講生にとって自己研鑽では得られない客観的な学びや系統的な学びができる利点があると考えられる。また、教育者にとって専門看護師や修了者を在職のまま受け入れることは、専門看護師教育課程の修了者が現在どのような活動をし、どのような課題を抱えているかを把握できるため、教育内容の見直しや課程修了後のフォローアップ、臨床との連携について具体的な視点を獲得することができる。専門看護師の継続教育の一つの選択肢として専門看護師教育のコースが位置づいたことは、成果の一つである。

## (2) 博士前期課程の充実による成果

### 博士前期課程の実質化と、専門看護師教育の充実を図ることができたこと

博士前期課程の改善として、従来、科目として単位化されていなかった専門看護師実習を「看護学実習（6単位）」として認め、科目履修を可能とした。これにより、平成20年度に1名が科目履修で看護学実習の単位を修得し、平成21年度に専門看護師の認定を受けることができた。

また、「ナーシング・フィジカル・アセスメント」の新規開講とシミュレーション・ラボラトリーの開設により、専門看護師教育の充実を図ることができた。

## (3) 調査研究による成果

### 専門看護師教育課程に対する専門看護師・専門看護師教育課程修了者（未認定）・看護管理者のニーズが明らかになり、専門看護師教育への示唆が得られたこと

2つの調査結果から得られた成果として、専門看護師教育課程は、「専門看護師としての実践力を高める教育」「修了後の継続した相談」等が、どの対象者からも共通して求められており、ニーズに応じていくためには、専門看護師教育に関わる教員が専門看護師教育に対する展望や熱意をもち、教育の質向上と臨床や専門看護師との協働による実習指導や修了後の支援を図る必要性が明確に示された。

### 専門看護師・専門看護師教育課程修了者と看護管理者で異なるサポートニーズが示され調整の方向性が明らかになったこと

専門看護師が看護管理者から期待されていると感じている役割やサポートニーズと、看護管理者の役割期待やサポートのずれや、専門看護師教育課程修了者のサポートニーズと看護管理者のサポートのずれ等が示され、調整の方向性が明らかとなった。結果を受けて、千葉県内の看護管理者と本プログラムの共同による専門看護師のクリニカルラダー・育成ラダー作成が行われた。

### 共同研究を通して専門看護師の交流・連携が促進されたこと

専門領域の異なる専門看護師がひとつの研究に取り組むことを通して、互いの活動や専門看護師としての信念等について意見交換を行うことができた。また、研究を通して分析方法や結果の解釈等を多様な視点から考えることができ、研究を通じた専門看護師の連携が促進された。

## (4) 看護管理者との連携による成果

### 専門看護師の育成・キャリアを支援するために活用できる看護管理者と専門看護師に共通の指標が示されたこと

4回の会議を経てクリニカルラダー・育成ラダーが作成され、専門看護師の育成・キャリアを支援するために活用できる看護管理者と専門看護師に共通の指標が示された。

### 看護管理者と本プログラムの共同によるクリニカルラダー・育成ラダー作成の過程で、看護管理者の専門看護師教育や活動環境に対する意識の深まりと共通理解ができたこと

作成の過程では「専門看護師、認定看護師の育成と活用についての展望」、「専門看護師・認定看護師の管理職兼務についての考え」、「施設・組織として、専門看護師をどのように活用したいと考えているか」、「専門看護師が機能している状態とは、どのような状態であると考えているか」「専門看護師が成長していると感じるのは、どのようなときか」等について意見交換がなされた。また、このラダー作成の目的を「県立病院において共通して活用できる、専門看護師として高い専門性を発揮するための能力指標およびサポート指標を明らかにすることで、専門看護師の育成・キャリアを支援する。この指標を作成することで、看護管理者と専門看護師が共通の指標を用いて活動内容やサポート等について合意形成を図ることができ、他の看護スタッフの理解を得るためにも活用できる。また、県内に共通した指標があることで、看護管理者と専門看護師の合意形成が促進できる」こととした。このような過程自体が、看護管理者の専門看護師への理解を深め、教育や活動環境の改善につながることを期待できる。

#### 修了後を見据えた専門看護師教育に対する具体的な示唆と指標が得られたこと

クリニカルラダー・育成ラダー作成により、看護管理者の専門看護師に対する期待やニーズ・課題等を知ることができ、修了後を見据えた教育に対する具体的な示唆が得られた。また、専門看護師への教育や修了後のフォローアップの際に評価に活用できる指標が得られた。

### 3. 今後の教育プログラムの改善・充実のための方策と具体的な計画

#### (1) 「専門看護師強化コース」の継続に向けた方策

本プログラム終了後も「専門看護師強化コース」は継続されることとなり、平成22年度は2名のコース生と1名の科目等履修生を受け入れることとなった。募集要項や履修審査等は、科目履修の審議と同様に審議されると共に、平成22年度からは本コースの履修内容やシラバスについても正規の書類のなかに項目を立て同じ冊子に掲載した。また、大学院教務委員会の下部組織としての「専門看護師強化コース・ワーキンググループ」も継続することとした。

CNS研修は、研修先との調整および費用が課題となる。2年間の受講生による授業評価の結果から、英文で求められる多数の書類を短期間に準備することの負担が示されたため、入学時から情報提供が行えるように書類を準備している。また、研修先と本看護学研究科側の窓口教員が決まり、経費を含め平成22年度の調整を始めている。現時点で研修生の費用は自己負担であるが、教員の費用は確保されている。国際シンポジウムに研修施設の教育研究者、看護管理者を招聘したことやCNS研修を通じた連携の強化により研修施設との連携が深まり、教員間の研究を通じた交流も始まっている。

#### (2) 博士前期課程の充実の継続に向けた方策

専門看護師実習を「看護学実習（6単位）」として認め、科目履修を可とすることは平成22年度以降も継続している。「ナーシング・フィジカル・アセスメント」は、2年間の受講生の授業評価の結果に基づき、看護のフィジカル・アセスメント能力を高める内容を補強するため、平成22年度より認定看護師等の協力を得て、「病態から身体機能、生活に至るアセスメント」と「対象特性別のアセスメント」の視点からアセスメントを行う演習を取り入れることとした。また、平成22年度以降のシミュレーション・ラボラトリーについては、看護学部学務グループと教員による管理体制を整えると共に、機器のメンテナンス費用を予算化した。

#### (3) 本プログラム終了後の大学院教育全体の充実・改善に向けた方策

平成22年2月に本看護学研究科の修了生に対し、本看護学研究科のカリキュラムと「専門看護師強化コース」の評価に関するアンケート調査を実施した。184名からの回収（回収率39.7%）が得られ、8割以上の修了生が本看護学研究科に研究能力を高めたり視野を広げる目的で入学し、8割以上が論文指導に満足し進学目的を達成したと回答した。本看護学研究科のカリキュラムについては7割の修了生が満足している一方で、看護研究方法等共通科目の必要性や論文指導体制の課題も示された。また、「専門看護師強化コース」については約30%がシンポジウムや報告会

に参加した、報告書を読んだ、ホームページを見たと回答し、50%がニュースレターを読んでいた。「専門看護師強化コース」に対する意見（自由記載）には、本コースへの関心や重要性が多く述べられていたが、専門看護師教育のなかでの今後の位置づけや社会的貢献が不明であるとの意見もあった。以上より、本看護学研究科のカリキュラムや「専門看護師強化コース」はおおむね良好に評価されているが、カリキュラム改善を含む課題も示された。

以上の結果と、本プログラムで実施した2つの調査研究の結果や高度実践看護に関する最近の社会情勢を踏まえ、本看護学研究科における専門看護師教育の充実と「専門看護師強化コースの」位置づけを検討しつつ、研究科のカリキュラム全体の改善を図るため、平成21年度よりカリキュラム改革の委員会が組織され、検討を始めている。

#### (4) 看護管理者との連携の継続

今後も、専門看護師の育成・キャリアを支援するために活用できる看護管理者と専門看護師が共通の指標として作成されたクリニカルラダー・育成ラダーの活用を通して、看護管理者との連携を図っていくこととなった。

## 4. 社会への情報提供

### (1) キックオフ講演会

平成20年3月16日（日）10:00～16:30、千葉大学けやき会館において開催した。講演会の目的は、「専門看護師育成・強化プログラム」の目指すものの周知を図ること、日本において専門看護師が担ってきた役割や課題を明確にすること、専門看護師養成の先進国である米国における専門看護師の位置づけや役割を理解することの3点であった。

参加者は、187名（内訳－看護系大学等の教員97名（51.9%）、大学院生・学生50名（26.7%）、臨床の専門看護師等34名（18.2%）、その他7名（3.2%））であった。「専門看護師育成・強化プログラム」の説明に続く基調講演では、「専門看護師育成・強化プログラム」の目指すところ、および、専門看護師養成の先進国である米国における専門看護師の位置づけや役割を示すために、デューク大学看護学部准教授でありデューク大学メディカルセンターのCNSとしても活動を行うDr. Brandonを招聘した。特別講演では、米国における専門看護師および高度実践看護師教育の動向を提示するために、高度実践看護師養成の専門家であり自らも高度実践看護を行っている、サギノウヴァレイ州立大学 看護学部 Dr. Clausを招聘した。また、日本において専門看護師が担ってきた役割や課題を明確にするため、リレーシンポジウムとして専門分野の異なる3名の専門看護師をシンポジストに招き、会場との討議を行った。講演会実施後のアンケートには、115名（61.5%）から回答が得られた。4段階の満足度評価では、どのプログラムも85%以上が「大変満足」「ほぼ満足」と高い満足度を得ていた。

### (2) 国際シンポジウム「専門看護師をめぐる展望」

平成21年2月15日（日）10:00～16:30、千葉市幕張メッセ国際会議場国際会議室において開催した。シンポジウムの目的は、日本における専門看護師の活動に実際を示すこと、全国調査の結果から専門看護師／専門看護師教育課程修了者の教育ニーズとサポートニーズを共有すること、専門看護師を育成する教育者および専門看護師を雇用する看護管理者が専門看護師に対してどのような展望を持ち連携や協働をしているのかについて、米国の現状と日本での看護管理者への調査結果をもとに日本での方向性を探ることの3点であった。

参加者は、252名（内訳－看護系大学等の教員96名（38.1%）、専門看護師を含む看護師、看護管理者等96名（38.1%）、大学院生・学部学生50名（19.8%）、その他6名（2.4%））であった。特別講演は、日本における専門看護師の活動を示すために、老人看護専門看護師で青梅慶友病院の看護管理者でもある桑田美代子氏を招聘した。調査報告では、本プログラムが行った専門看護師／専門看護師教育課程修了者の教育ニーズとサポートニーズの結果を報告した。シンポジウム「専門看護師をめぐる展望－教育者と看護管理者の立場から－」は、教育者の立場から、UCLA看護学部のDr.

Maliski とミシガン大学看護学部の Dr. Struble が、米国における Clinical Nurse Specialist 教育の歴史、現在の取り組み、将来への展望について講演した。看護管理者の立場からは、千葉県千葉リハビリテーションセンターの荒木氏が、調査結果をもとに日本の看護管理者が求める専門看護師への役割期待と専門看護師と教育施設への看護管理者からの期待について講演した。また、ロナルド・レーガン UCLA メディカルセンターの Suda 氏が、CNS の臨床実践への責任とその役割の重要性について講演した。総合討論では、米国における CNS と NP の教育の違い、専門看護師の実習時間と実習の質、専門看護師が実習に携わる意義、専門看護師を志望する学生への在学中および修了後のサポート等が話し合われた。シンポジウム実施後のアンケートには、163 名(64.7%)から回答が得られた。4 段階の満足度評価では、調査報告が 70%、他のプログラムは 80%以上が「大変満足」「ほぼ満足」と高い満足度を得た。

### (3) 専門看護師育成・強化プログラム成果報告会

平成 22 年 2 月 11 日(木・祝)、千葉大学けやき会館において開催した。報告会の目的は、「専門看護師育成・強化プログラム」の成果を報告すること、日本における専門看護師の教育や活動について本プログラムの成果をもとに検討することの 2 点であった。参加者は 155 名(内訳一看護系大学等の教員 67 名(43.2%)、大学院生・学生 42 名(27.1%)、臨床の専門看護師等 46 名(29.7%))であった。

本プログラムの 3 年間の取り組みと成果の概要を報告した後、「専門看護師強化コース」の各授業科目の成果を各科目責任者の教員から報告した。また、千葉県千葉リハビリテーションセンターの荒木氏より、本プログラムの全国調査結果を受けて開始した、看護管理者と本プログラムの共同による専門看護師のクリニカルラダーと育成ラダー作成の取り組みについて報告した。最後に、「専門看護師強化コース」の受講生 4 名からコースでの学びについて発表し、参加者と意見交換を行った。意見交換では、専門看護師と認定された者だけでなく専門看護師を目指す者にとっても、病態学や薬理学等の基礎的知識を深めることが重要であること、海外での CNS 研修における多様な学びについて話し合われた。報告会実施後のアンケートには、115 名(61.5%)から回答が得られた。4 段階の満足度評価では、どのプログラムも 85%以上が「大変満足」「ほぼ満足」と高い満足度を得ていた。

### (4) 成果報告書の発行

「キックオフ講演会報告書」は 1,300 部、「国際シンポジウム 専門看護師をめぐる展望 報告書」、および、「専門看護師育成・強化プログラム成果報告書」は各 2,000 部発行し、看護系大学・大学院、専門看護師、専門看護師が所属している医療施設等に郵送した。

### (5) ニュースレターの発行

平成 20 年 2 月にニュースレター第 1 号を発行し、以降、平成 22 年 3 月までの間に 7 回発行した。主な配布先は、看護系大学・大学院、専門看護師、専門看護師が所属している医療施設等である。約 1,500 ヶ所に対して郵送等で配布した。主な内容は、CNS 研修をはじめとする専門看護師強化コースの進捗状況や、シンポジウム等の告知、専門看護師強化コース講師へのインタビュー記事等、最新の情報を周知した。シンポジウム等では、ニュースレター発送時に同封した「FAX 申込用紙」を利用した申し込み者数が、全申し込み者数の約半数を占めており、印刷物媒体での情報発信は有効であった。

### (6) 公式ホームページ

平成 19 年末に公式ホームページを公開し、平成 22 年 1 月までの間に 30 回を超える更新を実施し、最新の情報発信が実現できた。掲載する記事は「新着情報」「履修プログラム」「活動の状況」「専門看護師とは？」の 4 つの区分に分け、閲覧者が得ようとする情報が簡単に見つけられるようにした。また、情報発信の一環として、国際シンポジウムの模様を収録し、映像・音声(日本語・英語)をスライドとともに公式ホームページにおいて公開した。国際シンポジウム会場に会場できなかった方に加え、参加者からも、わかりやすい日本語訳をもとに再度 web 上で視聴することでさらに

深い理解ができたとの意見があった。平成20年8月から平成21年12月末までの閲覧ページ数は約30,000ページであった。これは1ヵ月あたり約1,750ページ、1日あたり約56ページの閲覧があることを示しており、ホームページによる情報発信は効果的であったといえる。

#### (7) 講義の映像化と限定的な配信

専門看護師強化コースの欠席者に対する補完的な配慮として、講義を映像化し配信する試験的な取り組みを実施した。家庭用の安価なビデオカメラとワイヤレスマイク、及び既存の配信サービスを用いるだけで、ハイビジョンの鮮明な映像・音声の収録や配信が費用をかけることなく実施できた。今回は外部に非公開で、かつ科目履修不可の講義の映像化であったため、パスワードを知る者のみが閲覧できるようにした。視聴者からは、見やすく聞きとりやすかったとの意見が聞かれた。

#### (8) その他

本プログラムの取り組みについて、文部科学時報（2009年）や「千葉大学大学院看護学研究科における「専門看護師育成・強化プログラム」の取り組み（中間報告）」を雑誌（看護管理，2009年）に発表するとともに、取材への協力（「千葉大学大学院看護学研究科「専門看護師育成・強化プログラム」とは？」，ナースのためのステージアップナビ，2010年）等を行なった。

### 5. 大学院教育へ果たした役割及び波及効果と大学による自主的・恒常的な展開

#### (1) 千葉大学や今後の我が国の大学院教育へ果たした役割及び期待された波及効果

当該プログラムは、看護学研究科博士前期課程にある専門看護師教育の充実と、高度な看護実践能力と研究能力を備えた専門看護師リーダーの養成を目的として、開発された。中でも、「専門看護師強化コース」と称し、専門看護師あるいは専門看護師教育課程修了者を1年間在職のまま受け入れる、博士後期課程に連動したコースの新設を核とした博士課程の教育改編であることに特徴を持つ。現在、全国の看護系大学院では、高度な看護実践能力を有する者の育成について、専門看護師教育課程の履修単位数を増加させることで対応していく方針が出されているが、まさに当該プログラムはそれを先駆けて開発・実施したものである。その意味で、今回開発したプログラムは、時代の要請に応じた教育改革モデルを先んじて示したものとして我が国の看護系大学院教育への波及効果が大きいといえる。

また、近年、我が国では看護学教育の高度化を背景に、毎年、20余りの看護系大学院の教育課程が専門看護師教育課程として新たに認定を受けている。当該プログラムで開催した3回のシンポジウム等には、述べ260名の大学院教員が参加しており、専門看護師教育への示唆や専門看護師の活動が理解できたとする意見が数多く寄せられていた。従って、より高度な看護実践能力を有する者の育成のみならず、新たに専門看護師を育成する教育課程においても波及効果が大きいと考える。

千葉大学の大学院教育においては、看護学研究科博士前期課程の科目であるナーシング・フィジカル・アセスメントにおいて医学研究院の教員が兼任講師を務める等、大学院間の連携が強化され大学院教育が活性化するという波及効果が得られた。

#### (2) 当該教育プログラムの支援期間終了後の、大学による自主的・恒常的な展開のための措置が示されているか

大学院看護研究科では、当該プログラムの「専門看護師強化コース」を継続して開講することとし、看護学研究科履修案内、シラバスに掲載した。また、同コースの運営・検証・充実を図るために、専門看護師強化コース・ワーキンググループにて継続的に検討を進めている。シミュレーション・ラボラトリーを看護学部学務グループの管理とし、機器等のメンテナンス費用を予算化した。

一方、大学としても平成22年度の同コース非常勤講師確保の予算を計上し、同研究科においても必要に応じてシミュレーション・ラボラトリーに配置する技術専門職員の確保を図り、教育体制を整えている。さらに、海外派遣制度・競争的資金等を活用して海外研修を実施し同コースの充実を図ることとしている。

## 組織的な大学院教育改革推進プログラム委員会における評価

【総合評価】
<input type="checkbox"/> 目的は十分に達成された <input checked="" type="checkbox"/> 目的はほぼ達成された <input type="checkbox"/> 目的はある程度達成された <input type="checkbox"/> 目的はあまり達成されていない
<p>〔実施（達成）状況に関するコメント〕</p> <p>高度な看護実践能力と研究能力を備えた専門看護師リーダーの養成という、教育プログラムの目的に沿って、「ナーシング・フィジカルアセスメント」、「専門看護師のための最新薬理学」、「専門看護師のための最新病態学」等の科目を設定し、また、シミュレーション・ラボラトリーの開設により、大学院教育の改善・充実に貢献している。</p> <p>本プログラムについては、ホームページ・シンポジウム・ニュースレター等により、広く社会に公表しており、その成果についても公開しているので、波及効果も期待できる。</p> <p>さらに、採択時に付された留意事項への対応として、海外との組織的連携を図り、海外研修や講師招聘を実現させている。また、FDにおいて、教員の実践力向上の取組を実施している。</p> <p>支援期間終了後の取組については、履修案内・シラバスの作成、必要経費の予算化等、大学として自主的・恒常的な展開に関する措置はとられている。</p>
<p>（優れた点）</p> <p>専門看護師リーダーの養成としての「専門看護師強化コース」は、優れた教育プログラムとして評価できる。</p> <p>（改善を要する点）</p> <p>受講者のニーズに十分応えているのか、費用対効果もあわせて検証が必要である。</p>